

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 6

名譽のための



鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第5回大会

- ☆開催日 平成21年09月06日
- ☆開催場所 春立港～浦河港
- ☆入釣場所 春立港～春立4区
- ☆釣果 アカハラ 383 mm 4

	カジカ	353	mm	1
	重量	316	0	g
☆成 績	合計点数	1052	点	
	優 勝			

名誉のための

9月の大会はアカハラ釣り大会だ。ゴソゴソと大会の準備をしていると、珍しくも女房からこれまでの大会の成績について聞かれた。高くもない鼻を持ち上げて、一応今のところトップを走っており、この大会で年間優勝を決めてしまいたい旨を話した。今回の大会は魚が釣れないことは分かっている。9月初旬の日程であるため狙いはアカハラであり、異魚種の1本をどのようにとるかだ。アカハラ4本に婿になるか嫁になるかわからない連れ添い勝負なのだ。また、「嫁にしたいアカハラって美味しいの？」と何度も答えたような問い掛けにも丁寧に応えておいた。さらに、玄関先でエサのイカゴロをバツカンに移し替えていると、食べることも出来ない魚のためにと呆れかえられる。そして付け加えられた言葉がシャクに障る。「入賞の商品券を私に頂けるのでしたら、密かに応援していますけれど・・・」ときたもんだ。悪いけど名誉のためのアカハラだから・・・。

気もそぞろで夕飯を掻っ込んでいると酒が飲めることに気がついた。今日は集合場所に送ってもらうことになっているのだ。ハンドルを回す女房の隣に座って、グビグビとビールで喉を鳴らす。集合場所で女房が仲間に挨拶をしていると、以前女房と同じ職場だったことのある堀内氏から「お前の娘さんかと思った」と言われた。暗がりの中、年がらもなく髪の毛を三つ編みにしていた所為だろう。明日も迎えにも来てもらうことになっているので、大会後の昼食時にもビールが飲める。名誉のためのアカハラで祝杯というとなればよいのだが・・・

見せかけだけは

今回の入釣予定は春立と決めている。三石漁港周辺や浦里の磯も捨てがたいが年間優勝がかかっているので冒険は出来ない。春立漁港でアカハラをとった後、春立交番裏の根境でタカノハ、そして干潮時に向かう春立4区の浜を前進しながらアブラコを狙う予定だ。

大会範囲始点の春立漁港に着いた。この限界で大会を開いている釣りはないらしく、みんなノンビリと着替えをしている。早く見送って竿を出したいところだがなかなかバスが出発しない。見せかけだけは余裕がある素振りをして仲間を見送った。

一緒に港で釣る約束をした吉井氏がない。どうも港の外の磯模様を見て回っているようだ。中防の先端にギョギョライトの光が見えたので、様子を伺いに行く。地元の人が舟道に向かって竿を出しており、クロガシラ、カジカを狙っているという。ここで連れ添いも狙えるのなら申し分ないと、その隣でアカハラ釣りをさせてもらう許しを得てからおもむろに竿を出す。しかし、アタリは出ない。そこで練りに練った新開発の仕掛けを取り出

してみる。これは、食い渋っているアカハラを幻惑するために、キラキラシートを貼った発泡スチロールをゴロバリのハリスに通したものだ。アメリカ屋漁具に置いてあったタカノハの専用仕掛けにヒントを得たのだ。オモリは2号とし、磯竿で振り込む。しばらく音沙汰がなかったがノッペリとした海面上で魚が騒ぐ音がして、竿先を見ると大きく揺れている。竿を煽ると35cmほどのアカハラが食いついていた。発泡スチロールの浮力が大きすぎて2号のオモリでは沈まず、海面上を漂っていたイカゴロに食いついたのだ。オモリを5号にして沈める。

港の中央で打っていた吉井氏が大声を出した。コンチキショウともクソッタレとも聞こえてくる。おそらく大物を取り損なった痛恨の雄叫びだろう。間もなく吉井氏がやって来て、大物は捕り逃してしまったがアカハラはもう揃ったと宣う。それで慌てて吉井氏の側へ引っ越しをする。移動している間にも、吉井氏は静かに次から次へとアカハラを取り込んでいる。大声を冷やかしたために吉井氏は音無の構えだが、海面やコンクリート面を叩く獲物の音が大きく響いてくる。腹がデブプリとして45cmはありそうなものだ。仕掛けはと見ると20号の天秤仕掛けだ。私のようにネットやキンキラシートを付けたらず実シンプルなものだ。それに引き替え私の竿は相変わらず音無のままだ。すると、たまりかねた吉井氏が「お前はいつ移動する？まだか？まだ揃わないのか？しょうがないなあ、ここでやれ。俺のゴロを使ってもいいぞ」と釣り場もゴロも譲ってくれた。それでも一向に私の竿にはアカハラが来ない。

吉井氏はそんな私に業を煮やして、「移動するときに声を掛けてくれ」と漁港の右の磯に向かった。しかし間もなく戻ってきて「駄目だ。ゴミがたまったら釣りにならん。仕掛けを2本失った」と、今度は中防にいる地元の釣り人とおしゃべりを始めた。私が移動するのを待っている様子なので片付け始めると「先に行くぞ」と4区の方に行ってしまった。

なんとかアカハラ4匹を揃えて追いかけると、主のない吉井氏の荷物が4区のバス停前に置いてある。周辺の漁師が寝静まっているころなので、狼の遠吠えや鶏の関の声のようなフォーともクックルーともいうような奇声で吉井氏に呼び掛ける。しかし、現れないので、付近の磯の様子を観察していると、遠くからやって来た。そして、「何処も波が高いので港の方に戻ってみる」と言い残して闇夜に紛れてしまった。

見せかけだけは狙い通り

春立交番裏に向かう。昔の記憶を辿って行くと、周辺には立派な防潮堤が築かれており、その舟揚場から出た砂浜で竿を出した。赤黒い根回りに付くハゴトコがポツンポツンと釣れてくる。タカノハは砂地に根があるところと聞いていたので、市販のタカノハ仕掛けを遠投するが、チョコチョコとイタズラをするのはハゴトコばかりである。そこへグッと竿を引き込んだ後、糸フケが出るアタリが出た。半信半疑で竿を煽ると念願のタカノハだ。アタリは見せかけだけで残念ながら規定の35cmに届いておらず、海にお帰りを願うしかない。30cmほどのアブラコが釣れたがこれが嫁になってしまうのだろうか？すっ

かり夜が明けてアタリもなくなった。

「釣れたか？」と声がする。振り返ると、コンブ拾いのための駕籠を背負った若い方で釣りはやらないようだ。手を横に振ってから「今年の昆布漁はどうですか？」と声を掛けると同じように手を横に振る。荷をキャスターに積み込み4区に向かって歩き出す。昆布を広げていた老婦人に今年の漁模様について尋ねてみると、雨が続いて仕事にならずいまだに漁を続けているということだ。

4区に着いた。一緒に釣りをした今は亡き佐々木秀美氏が50cm台のアブラコをダブルで抜きあげた舟揚場には昆布を引き上げる重機が置かれていた。その周辺ではこの晴れ間を待ちわびた如く忙しそうに昆布干しの作業をしている。私は迷惑にならないようにと少し離れた舟揚場で竿を出す。

ここでもハゴトコばかりである。たまたまカジカも釣れるのだが25cmに満たないものばかりだ。遠投していた25号竿にカジカを思わせるよいアタリが出た。抜きあげると35cmを超えるカジカで、嫁にしていたアブラコに離縁を言い渡すことができた。

再び名誉のための

審査結果

優勝	鹿島釣狂	1052点	(アカハラ383mm+カジカ 353mm+3160g)	春立
準優勝	嵐光博	916点	(アカハラ409mm+カジカ 265mm+2420g)	盈進
3位	前野達志	902点	(アカハラ381mm+アブラコ265mm+2560g)	浜荻伏
4位	大前健治	868点	(アカハラ344mm+カジカ 312mm+2120g)	浜東栄
5位	堀内正博	839点	(アカハラ361mm+カジカ 242mm+2360g)	三石
身長優勝	吉井博	1050点	(アカハラ412mm+アブラコ276mm+3620g)	春立

審査の結果、名誉のためのアカハラに嫁のカジカが効いて優勝することができた。しかし、審査会場では魚の管理が悪いことを指摘された。外海のアカハラは銀色にピカピカと輝いているのに比べ、私のモノは鱗が取れて赤黒く悲惨な姿になっていた。それでもアカハラには違いなく太った港内のモノの方が重量を稼いでくれたのだ。腹を割いてみると卵がびっしりと詰まっていた。この時期、アカハラは川に登るサケの卵を狙って一緒に遡上すると聞いている。港内のモノは、シャケの匂いを未だ感じず、その時期を狙って体力を温存しているのだろう。

審査が終わって再びアカハラ釣りが話題となった。同じ港でゴロを打っていたのにも関わらず、吉井氏に比べて仲俣にはアカハラが来なかったということについてだ。それはどうもゴロが原因だというのだ。仲間は、磯ではゴロが波に揉まれるのに対して、港の中では揉まれることがないのでゴロを手で潰してから打ち込んでいるらしい。私はゴロをなるべく潰さないようにと気を遣いながら打っていたのが敗因だというのだ。

私はアカハラ釣り名人の庄司氏の隣でいつも白旗を揚げていた。磯では遜色のない自分が、港の中での実績がなかった謎解きができたように思う。次回の大会審査規定は2魚種10匹となるので、音調津漁港で是非アカハラを狙ってみよう。もちろん、ゴロは潰して使ってみるのだ。

ともかくも次回のためのエサにアカハラだけは確保できた。しかし、仲間は「活きが悪く大きすぎる。現場で1匹釣ってそれをエサにすればよい」というのだ。まあ、それはそうだが、果たしてその1匹が釣れるのだろうか……。

摩訶不思議

私は今まで多くの釣り仲間と出会ってきた。私が師匠と仰ぎ、釣遊会入会の切っ掛けを作ってくれた前野氏。今年初めてアナゴを釣ることが出来たのも彼のお誘いがあったからだ。今回一緒に釣り場に入った吉井氏は、私に譲ったアカハラのために優勝をさらわれたのだが、慚然とした表情は一切見せない。数え上げればきりがないのでこの二人だけにとどめておくと、これからの残り少ない人生でも、もっともっと多くの仲間との出会いがあることだろう。

吉行淳之介は『未知の人』で「どんな人間でも、何かのキッカケで知り合うまでは、未知の人である。そんなことは、あらためて言うまでもないことだが、未知の人が未知でなくなるその一線には、言うに言われぬ摩訶不思議なことがある」と述べている。この地球が生まれてから永遠と続いてきた悠久の時間の流れの中で、人間の一生など地球がまばたきするほどの瞬間だろう。その一瞬に、広い宇宙の中で同じ時代に生まれて出会うということは、不思議な縁があると思えない。そして、その人との出会いは、悲しみや切ない思いをもたらすこともあるだろうけれど、それよりもたくさんの喜びや感動をもたらしてくれるに違いない。

久保田万太郎は『わかるとき』で「どこで、どういう風にならなくなったものが、どこの追分でどういう風にわかれるという、その逢い分かれの姿を考えて、私はいつも、ある深い悲しみに打たれる」と述べている。私に残されたこれからの人生にも多くの悲しい別れがあることだろうが「釣遊会仲間との遭遇ほど、味なものはない」と言って別れたいものだ。



本日の入賞者 左から準優勝：嵐 光博、身長優勝：吉井 博、重量優勝：鹿島釣狂、3位：前野達志。

本日は暖かく、私は夜中からこの出で立ちで釣りをしていた。それでも、日が差し始めてからは汗が流れる状態だった。